

現場からの報告

詩を身近にさせる指導について

大塚 大蔵

「好きな詩人をあげてごらん」というと、松尾芭蕉、小林一茶、場合によっては吉幾三らの名があがってしまふ……とにかく、今までの実生活の中で詩との関わり、何より興味が乏しいのだから仕方がない。こんな中一男子生徒が、どうすれば詩を身近かなもの、楽しいものに感じるのか——谷川俊太郎の『朝のリレー』（光村図書・国語Ⅰ）を教材にし、この課題解決の第一歩として取り組んでみた。この詩は、世界中の若者同士が、お互い、自分の過ぎた「朝」をリレーしていくことにより、地球に住む仲間として『連帯』していくことを呼びかけた詩である。

まず、詩の持つ「リズム」を楽しむために、毎時間の始めにクラスの全員での音読を繰り返させてみた。最初は各自、自分のペースでバラバラに読んでいた生徒が、お互いの声を聞きあうようになり、やがて一つになっていく。そして、単元の終りには、クラスの全員が暗誦できるようになっていた。その時に「へえ、みんなの声が一つになると、きれいなんだな」と言った生徒の言葉が印象的だった。

また、谷川俊太郎の詩の中で、メロディのついでているもの（『鉄腕アトム』「生きる」）を紹介、このレコードを聴かせた。

「詩っていろいろあるな」と思った生徒もいたようである。一方、せっかく、暗誦までさせた生徒をどうしたら今後も生徒の心に残すことができるか、そしてこの詩のテーマのように「世界に呼びかけること」ができないか、思索した結果、外

国にいる若者と文通を通じて、実際に「朝のリレー」をしてみようと思いついた。

幸い、私の友人がクウェイトの日本人学校の国語教員として赴任している。彼に相談をしてみたところ、彼の学校も同じ教科書を使用しており、すでにこの詩を学習した生徒もいるという。そこで、クウェイトの日本人中学生との文通が実現する運びとなった。これにより、実際にだれかと「朝」をリレーすることができるし、ふだん、手紙を書く機会のない生徒たちから手紙を書かせる良いチャンスにもなる。そして何よりも、これから手紙のやりとりの度に、この詩を話題にできる、つまり、継続して詩の話ができることが嬉しかった。これにより、この詩の授業が一時的な知識の伝授に留まらず、大きな広がりをもてるのでは、と期待したからである。

さて、クウェイトからの手紙が届いた。すでに昨年『朝のリレー』を学習した中二の生徒は、きちんと「クウェイトの朝」を話題にして手紙を送ってきてくれた。また、教師をしている友人は、「世界の広さ」、「世界から見た日本」ということについて書いてきてくれた。早速、授業で読み上げてみたところ、クウェイトの生徒が「自分たちの朝」を、我々に送ってくれたことを実感してくれた生徒が多かったことが、とても嬉しかった。しかし、この手紙に対しての返事を書かせるのが大変なことであった。一時間使っても便箋一枚はおろか、数行を埋めることすらできない生徒が続出……新米国語教師の頭痛のタネは尽きない。

今年、この友人が帰国してしまう。また、やってみるといろいろ問題も出てきた。しかし、授業を通して習得した知識が時間を追うごとに、大きく広がっていく——このことを実現することが、我々教師の夢であり、求められているもの一つである。私は信じる。中身の少ない頭を絞りつつ、更に指導法の摸索は続く。

（高輪中学校）

魔法の国の王女サリーは、約束の期限が近づいても、留学先の人間界を去る決心がつかなかった。心優しい人間との出会いは、最早動かし難い人生の一部だったのである。また、人間界を去る時には自分の存在を人間の記憶から消さなければならぬ、という魔法の国の掟も、彼女を迷わせていた。人間から自分の記憶が消えれば、思い出は、永遠に自分を孤独にするだろう。矢の催促にも思い切れずとうとう迎えた最後の夜、突然、彼女の通っている学校が火事になるのである。

彼女は全てをおいて駆けつけたが、当時の木造校舎は火の回りが早く、既に手の付けようがない。親友のよしちゃんやすみれちゃんも夜空へ立ち上る炎に、呆然と頬を照らされているだけである。日頃見慣れた校舎は、さながらここを通り過ぎていった多くの若さを聚めたかのように光り輝いていた。サリーの目に、人間界での幾多の出来事がめぐる。教室に貼られたみんなの絵が、炎に捲れ上がって行くのが見える。目の前で、想い出の最後のよすがが燃えてゆく。彼女は我を忘れ、やおら校門の門柱の上に現れると、燃える校舎を復元する大呪文を叫ぶのだった。見物が息を飲んだ瞬間、しかし彼女は、校舎と引き替えて、想い出の全てである筈の、人間との信頼関係を失って

しまった事にはじめて気付く。最早彼女は人間ではない。人間とは相容れない魔女なのである。

僕はこの場面に何度となく感動した自分をどこかで認めたくなかったし、また、人生解ったような気にもなりたくなかった。だが人の一生を支配する「教育の力」とは、この「学校の幻」である、と今は認めてしまおう。小学校以来未だ外に出られない僕は、もう幾ら手を延ばしても、生身の人間を掴む事は出来ない。もう幾ら目を凝らしても、「そのまま」の人間を見られない。見るもの触れるもの、全てが「学校の幻」である。悪質な富山の葉売や追跡爆弾としか思えない行為が演出のひとつである事も、大人はそれを使いこなせる程強くないであろう事も、そしてこの幻は大人の「経験」から学ばれたものではないであろう事も、何となく解るけど、思えばそれも皆「学校の幻」なのである。

卒業後初めて講師として勤めたのは、全国初の総合選択性高校である。教育課程は、ほぼ総合大学に準じ、七つの学系と、百五十を超える選択科目が用意されている。教員は、二百人、生徒は三千人を超え、敷地は約四万七千坪、国語棟と呼ばれる建物さえある。その「個性を生かす」教育を慕って、競争率は年々高く、教壇で話をする側にしても、例えば「徒然草の講読」一クラス十六人連続九十分の時間が実現する。正に幻は「理想」に近づいたが、この田園に品を替えて出現した新しい擬似夢に、誰よりも、友達になりたい高校生が取り込まれてゆく理不尽には、しばし学校の幻も破れ、僕は現実の道に迷うのである。

(埼玉県立伊奈学園総合高等学校・現早大大学院教職在学中)